広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 XXII・XXIII 2011. 3. 22

Johnson の音楽鑑賞指導法

－*Intelligent Listening to Music*（1935）の検討を通して－

小林　美貴子
（本講座大学院博士課程後期在学）

The Teaching Method for Music Appreciation of Johnson: Through *Intelligent Listening to Music* (1935)

Mikiko KOBAYASHI

Ⅰ．研究の動機と目的

19 世紀に蓄音機や自動演奏ピアノが発明されたこと，20 世紀初期にラジオ放送が開始されたことに関連し，欧米では音楽鑑賞教育が 20 世紀初期から注目され始めた。イギリスにおいても，音楽鑑賞教育の指導書が出版されたことや，1924 年に学校音楽放送が始まったことから，音楽鑑賞教育への関心が高かったことがわかる。

20 世紀初期のアメリカの音楽鑑賞教育に関する先行研究は多々見られるが，同時期のイギリスの音楽鑑賞教育に関する研究は数少ない。そこで，筆者は当時のイギリスの音楽鑑賞教育に着目する。20 世紀初期のイギリスにおける音楽鑑賞教育に関する先行研究として，Moutrie（1981），Jorgensen（1987），寺田（1994），Prictor（1998），Symes（2004），Rainbow（2006）があげられる。これらの先行研究では，20 世紀初期のイギリスにおける音楽鑑賞運動に関わった人物として Langdale，MacPherson，Read，Scholes，Davies の 5 人があげられていた。また，1908 年にイギリスにおいて初めて音楽鑑賞教育に関する記事が出されたこと，イギリスにおける音楽鑑賞教育に関する最初の書物である *Music and its Appreciation*[1] を MacPherson が 1910 年に出版したことなどから，イギリスにおける音楽鑑賞運動が始まったとされている[2]。

筆者はこれまでに，先行研究であげられていた 5 人の中でも，MacPherson および Scholes の 1921 年までに出版された著書を複数検討してきた。その結果，MacPherson は鑑賞 appreciation を真の聴取 true listening と同等のものとして考えていたこと，MacPherson が考える音楽鑑賞は，教師の実際の演奏を音楽鑑賞の手段として，曲中での音の役割や楽曲の形式を把握し，作曲家の特徴である楽曲の細部までを聴き取り，楽曲を理解することであること，聴覚力の育成を重視していたこと[3]，が明らかになった[4]。一方 Scholes は，楽曲を聴かせる際に蓄音機や自動演奏ピアノを用いて，楽曲の構造を把握するとともに，楽曲が作られた背景や作曲家に関する知識，楽器の音色など，より広い視点で聴取することであること，聴覚訓練を行うことが音楽鑑賞に必要であると考えていたこと，が明らかになった[5]。

本稿では，1930 年代に視点を移し，イギリスにおける 1930 年代の音楽鑑賞教育の特徴を捉える手がかりとして，先行研究ではあげられていなかったが，音楽鑑賞教育に関する著書を複数出版している Johnson に着目する。Johnson は，労働者教育協会に所属する音楽科の教師であり，公立の男子校の音楽教師でもあった。本稿では，Johnson の著書の中でも『音楽の知的な聴取』と題されたものを検討することによって，彼の音楽鑑賞指導法の特徴の一端を捉えることを目的とする。

Ⅱ．対象とした史料

本稿で扱う史料は，以下のものである。

・Johnson, W. W., *Intelligent Listening to Music*, Sir Isaac Pitman & Sons, 1935.

Intelligent Listening to Music には，対象とする読者の年齢は明記されていない。したがって *Intelligent Listening to Music* は単に「聴取者」を対象として書かれているにすぎない。イギリスにおいて MacPherson，Scholes，Davies らが音楽鑑賞運動を開始してから，音楽を聴取する国民が数百万人まで増えたこと，また，ラジオ放送や蓄音機などのメディアが普及したために，音楽が至る所であふれているということを Johnson は述べている。しかし，このことに関連し，至る所で絶えず流れてくる音楽を人々が真剣に聞いていない，と Johnson は嘆いている。このような状況を改善するために，すなわち，本当の喜びと鑑賞へと人々を導くために，Johnson は自身の音楽鑑賞指導法を *Intelligent Listening to Music* に著した。

Ⅲ. *Intelligent Listening to Music* の内容

Intelligent Listening to Music は，「1. 音楽の聴取について」，「2. 音楽の始まり」，「3. フォーク・ミュージックの聴取について」，「4. 水平の（音楽の）聴取 Horizontal Listening」，「5. パターンの音楽の聴取」，「6. ロマン派の音楽の聴取」，「7. 現代音楽の聴取」，「8. 楽器の音色の聴取」，「9. オペラおよびバレエの聴取」，「10. 音楽と（他の）芸術」，という 10 章で構成されている。1 章から 10 章までの各章の終わりには「ヒントと課題」という項目があるが，この内容は，その章の本文よりも価値がある[6] と Johnson は述べている。また，巻末には「コーダ」があり，ここでは，10 章までの内容を読者自身が確認するための質問等が 17 項目ほど用意されている。

まず，1 章から 10 章までの内容を，(1) 聴取に必要なこと，(2) 音楽史，(3) さまざまなスタイルの音楽の聴取，(4) 楽器の音色の聴取，(5) 音楽と（他の）芸術，という 5 つの項目に大別し，概観していく。次に「ヒントと課題」を，そして最後に「コーダ」にあげられている質問等の 17 項目をとりあげる。

1. 各章の概要

(1) 聴取に必要なこと（1 章）

Johnson は，「聴取者」を以下の 3 つに分類している。

表 1　Johnson の考える「聴取者」の分類

ふと耳にする人 Overhearers	細部まで傾聴することはできない。漠然と音楽に魅了される。
聴衆 Hearers	細部まで傾聴するとは限らないが，美しい作品に夢中になる。
知的な聴取者 Intelligent Listeners	音楽教育を受けており，音楽の細部まで魅力的なものであると考え，音楽の速さ，響き，フレーズやテーマ，転調，などに気づく。

* *Intelligent Listening to Music*, pp. 3-4 より筆者作成。

また，知的な聴取に必要なこととして，以下の 8 点の理解をあげている。

表 2　Johnson が知的な聴取に必要とすること

1) 作品の性質	声楽曲，器楽曲などの分類。声楽曲では，伴奏の有無，ソロか多声か，という点も考慮する。器楽曲は，ソロ，小編成，大編成，といった編成にも考慮する。
2) スタイル	前古典派，古典派，ロマン派，といった分類。また，和声法，対位法の分類。
3) 年代	作曲家が生きた年代とは無関係に思いや感情を表現しているが，その時代の観念 conception という中で表現することしかできない。
4) 基本となるテーマ	私たちがテーマを自分の中に取り入れることができるように，テーマは正確に，あるいは不正確に繰り返される。

5）そのテーマの使用法	転調，同主調への転調，リズムは変えずに音型を変えること，音型は変えずにリズムを変えること，支えている和音を変えてメロディを保持すること，補助的な音符をまきちらすことで主なテーマを装飾すること，小さくてリズミカルな動機を楽章へと拡大させること，新たな雰囲気を導入するための動的な変化（メロディの音は変わらないが，速さや拍子が変化する）。
6）パターン（形式）	2部形式，3部形式，伝統的な楽章の形式などの分類。
7）音価	音のさまざまなタイプと質。
8）作曲家の個性	作品は，作曲家の個性を表明する。また，その時代の精神も映し出す。

* *Intelligent Listening to Music*, pp. 9-22 より筆者作成。

Johnson は，「5）そのテーマの使用法」においてさまざまな譜例を提示しており，テーマがどのように変化しているのか，その前後を比較することができるように記している。

（2）音楽史（2章）

ここでは聴取の内容を含めず，主に西洋音楽史について簡潔にまとめている。初期の声楽の音楽，教会の音楽，多声音楽の起源，対位法，などについて説明することで，1600年までに音楽がどのように発展してきたかを述べている。合唱曲の発展に関しては，ポリフォニーの音楽とホモフォニーの音楽の構造を，各声部の動きを図示することで表している。楽器に関しては，リュート，ヴァイオル，リコーダー，ヴァージナル，ハープシコード，オルガンについて簡潔に説明している。また，現在までの音楽史の流れを年表にまとめている。

（3）さまざまなスタイルの音楽の聴取（3-7章，9章）

フォーク・ミュージック，水平の音楽（フーガなど），パターン音楽（メヌエットやロンド形式などの作品），ロマン派の音楽，現代音楽[7]，オペラおよびバレエ音楽の聴取について述べている。フォーク・ミュージック以外では，そのスタイルを用いた代表的な作曲家の生涯に関しても述べている。

「4. 水平の（音楽の）聴取 Horizontal Listening」および「5. パターンの音楽の聴取」という章では，フーガ，ヴァリエーション，2部形式，3部形式，ロンド形式，メヌエットとトリオ，スケルツォ，ソナタ形式，といった形式に関して説明している。特にソナタ形式に関しては，提示部，展開部，再現部に分けて細かく説明している。また，交響曲の各楽章の特徴や形式，交響詩や標題音楽の登場，協奏曲に関しても簡潔に述べている。

「6. ロマン派の音楽」は，詩的なスタイル，絵画的なスタイル，印象派のスタイルという3つの部分から成る。詩的なスタイルでは，ロマン派という意味，ベートーヴェンの影響，シューベルト，メンデルスゾーン，ウェーバー，シューマン，ブラームス，ショパン，という項目に分けて説明している。絵画的なスタイルでは，リスト，ベルリオーズ，交響詩，リヒャルト・シュトラウス，などについて説明している。印象派のスタイルでは，印象派の目的，ドビュッシー，ドビュッシーの手法，その他の印象派（ラヴェルや，デリウスおよびスコットなどのイギリス人の印象派の人物），などについて説明している。

「7. 現代音楽の聴取」では，まず，現代音楽の多くは奇妙かつ複雑で，分かりにくいために，現代音楽を鑑賞するという問題は難しいと述べている[8]。現代音楽を聴取するための徹底的な準備の必要性，写実主義，個人主義，反ロマン主義などについて，簡潔に説明している。バルトークやラヴェルの楽曲の楽譜，スクリャービンが用いたコード，ホルストが用いたリズムなどを例示している。

「9. オペラおよびバレエの聴取」という章では，まずリュリ，1750年から1850年までのオペラ，ヴァーグナー，20世紀のオペラ，という項目を通してオペラの発展についてまとめている。次に，ストラヴィンスキーおよびその他の作曲家の説明とともに，バレエの発展についてまとめている。

（4）楽器の音色の聴取（8章）

ピアノおよびオルガンの説明から始まる。オーケストラの編成（各楽器奏者の数）を提示し，木管楽器，

金管楽器，打楽器について簡単に説明するとともに楽器のイラストを載せている。ハイドンおよびモーツァルト，ベートーヴェン，シューベルト，メンデルスゾーン，ベルリオーズ，ヴァーグナーの楽曲の楽器編成について述べることで，オーケストラの楽器編成の発展を簡潔に説明している。スコアに関する説明とともに，各楽器の音域を図表にして整理している。オーケストラで用いられない楽器としてサックスをあげている。また，ミリタリーバンドやブラスバンドについても説明している。

(5) 音楽と（他の）芸術（10章）

ここでは，色，リズム，スタイルなど，音楽と他の芸術との共通点をあげて説明している。

2. 各章の「ヒントと課題」

各章にある「ヒントと課題」にあげられている項目の中から複数とりあげ，表3にまとめた。●の項目は音楽以外の芸術と関連づけられたものであり，○の項目は音楽そのものに関するものである。各章の「ヒントと課題」には，3－13の項目がある。

表3　*Intelligent Listening to Music* の各章のヒントと課題

	章のタイトル	ヒントと課題
1	音楽の聴取について	●大聖堂の写真，有名な絵画の複製，壁紙やカーペットにあるパターンのデザインを（1）まとめて，そして（2）細かく学習に費やす時間は，十分に価値がある。 ○自分の好きな音楽作品のリストを作り，そのスタイル，時代で楽曲を分類する。 ○ラジオ放送および蓄音機の使用を強く推奨する。 ○自分が行くコンサートのプログラムをファイリングする。
2	音楽の始まり	○この章の始めに述べた旋法を，ピアノで弾いたりハミングしたりする。 ●ギリシャの寺院とローマの寺院の写真とを比較し，視覚的により訴えてくる方を決める。 ●壁紙のパターンの構造と，輪唱やカノンの構造を比較しなさい。 ○マドリガルや，ハープシコードの曲のようなエリザベス朝時代の音楽。
3	フォーク・ミュージックの聴取について	○フォーク・ミュージックへの愛を育てる唯一の方法は，単に音楽を聞くことである。 ○他の国のフォーク・ミュージックを聴く際に，この国の節 tune および特徴との類似点を書き出す。 ○さまざまなレコード。
4	水平の（音楽の）聴取	○水平の音楽に対するセンスを育成することと関連して，蓄音機およびラジオ放送の使用を強く推奨する。 ○カノンおよび輪唱を聞き，各パートが登場するのは何拍目であるか書きとめる。 ○メサイアにあるようなヘンデルの合唱曲。 ○印刷されたスコアは，水平を把握する際に大いに役に立つ。 ○バッハのインヴェンション。
5	パターンの音楽の聴取	○本文であげなかった組曲（アルマンド，ジーグなど）に関する説明。 ○ここに複数あげている楽曲のパターンが，2部形式，3部形式など，それぞれどのようなパターンであるか述べる。 ○できれば蓄音機を用いて，提示した楽曲のある楽章を1-2回通して聞き，頻繁に現れるテーマをAやBで紙に表す。曲の残りの部分がA，B，あるいは別の新しいものであるか決める。 ○ここに複数あげている楽曲の楽章に，コーダがあるかないか。

6	ロマン派の音楽の聴取	I　詩的なスタイル	●次に美術館に行くときに，古典派の絵とロマン派の絵を識別してみる。 ○ノクターンや幻想曲のように，ロマン派の音楽のタイトルリストを作る。 ○シューベルトの歌曲をいくつか勉強する。
		II　絵画的なスタイル	○ラヴェルのマザーグース，サン＝サーンスの動物の謝肉祭，シベリウスのフィンランディアなど。 ○交響詩の「楽曲全体を統一づけるテーマ motto theme」を覚える。
		III　印象派のスタイル	●印象派の音楽の学習は，印象派の詩および絵画と密接に関連づけて行うべきである。 ○ドビュッシー，レスピーギなど，印象派の作品。
7	現代音楽の聴取		○同年代の音楽を理解する最良の方法は，単に何度も聞くのではなく，できるだけ多く読むことである。作曲家やその作品，コンサート，放送プログラム，新しいレコードへの批評を読む。現代音楽のコンサートの，解説つきのプログラムをすべて保管し，ファイリングする。これらは，そこで演奏された現代音楽を再び聞く際に，評価できないほど重要なものである。 ●一般的に，現代の芸術に興味をもつこと。
8	楽器の音色の聴取		○オーケストラのコンサートで役に立つこと－ ・オーケストラの4つの楽器群の配置を書きとめ，指揮者から最も遠い楽器奏者と，最も近い楽器奏者を決める。 ・チューニングのAの音を出している楽器奏者を探す。 ・指揮者の動きを学習する。 ・弦楽器および金管楽器奏者がミュートを使っているかどうか観察する。それによる音色の変化を聴取する。 ○できるだけ多くの楽器に触れ，調べる。また，ピアノおよびオルガンの内部も。 ○オーケストラの楽器すべての音質 tone quality に詳しくなること。 ○各楽器の音色を，有名な節を演奏することで示しているレコードを聞く（レコードナンバーまで詳細に提示している）。
9	オペラおよびバレエの聴取		○徹底的に準備し，劇場に訪れることによってのみ，オペラおよびバレエへの愛が育てられうる。 ○オペラの序曲やバレエを聞く前に，そのオペラやバレエに関する情報を探す。
10	音楽と（他の）芸術		○スタイルという言葉のさまざまな解釈について。

**Intelligent Listening to Music*, pp. 22-165 より筆者作成。

表3から，本書の「ヒントと課題」では，ラジオ放送や蓄音機を用いて楽曲を聴取することや，実際にコンサートを聴きに行くことが求められているといえる。「8. 楽器の音色の聴取」に見られるように，オーケストラの楽器の編成や，各楽器の位置，音色，楽器の構造など，楽器の音色のみを聴くのではなく，楽器そのものについて幅広く学習することが求められている。また，「1. 音楽の聴取について」，「2. 音楽の始まり」，「6. ロマン派の音楽の聴取」の章における「ヒントと課題」では，絵画や詩といった音楽以外の芸術と関連づけて行う項目も複数見られた。表1では省略しているが，Johnson はほとんどすべての「ヒントと課題」において，音楽鑑賞に関する Scholes の著書や，音楽の形式に関する著書，オペラに関する著書など，さまざまな参考図書を提示しており，単に音楽を聴くだけでなく，楽曲や作曲家に関することなどを読むことも求めていた。

3. コーダ

Johnson は，序文およびこのコーダにおいて，「音楽鑑賞に関する本は価値のある手助けであるが，芸術の真の理解は，注意深くねらいを定めた聴取を我々が長期にわたって身につけるまで，ほとんど発達しない。」[9] と述べている。表 4 に示した 17 項目は，レコードを用いて，自身の成長を確認したいという聴取者のために用意されたものである。まず，受動的に作品を通して 1-2 回聴くことから始めること，次に，17 項目を通して読むこと，そして，時には 17 項目の答えを書き出しながら，（質問をすぐ手の届く場所に置いて）必要とするだけ聴くこと，と Johnson は説明している[10]。

表 4　*Intelligent Listening to Music* のコーダ

1	その音楽は，音楽史のどの時期に属しますか。
2	表現のスタイルは何ですか。
3	音楽が具体的な何かを暗示するならば，その作品にタイトルをつけることは可能ですか。
4	作品を適切に表す形容詞のリストを作りなさい。
5	作品は形式を有していますか。もしそうならば，作曲家が採用した手法を提示しなさい。
6	フレーズの長さは普通，あるいは普通ではないように思いますか。
7	どのような拍子が音楽に適するのでしょうか。
8	(a) ソロのパート，(b) 伴奏は，どの楽器が担当していると思いますか。
9	伴奏は厳密に一定ですか，すなわち，始めから終りまで，同じコードは同じ楽器で繰り返されていますか。
10	“本物の legitimate” オーケストラの楽器以外（の音）が聞こえますか。
11	どの楽器が “調和していない”，すなわち，作品の他の（楽器が演奏している）調とは異なる調で演奏しているように思いますか。
12	あなたは，管弦楽法は複雑で難解なものであると思いますか。それとも単純でつまらないものであると思いますか；全音階，あるいは半音階（はどうですか）。
13	どんな方法で，終結部は特に興味深いものになるのでしょうか。
14	あなたはこれを深刻な作品であると考えますか。
15	同じスタイルで書かれている作品は，他にどのようなものがありますか。
16	作曲家，作曲家の国民性，作曲家の “楽派” に関するヒントはありますか。
17	その活動から，さらなる見解は得られましたか。

**Intelligent Listening to Music*, p. 167 より筆者作成。表中の（　）は筆者が加筆した部分である。

また，以上の 17 の質問に対する Johnson の答えも用意されている。

Ⅳ. 考察

本書は，各章の本文において，①聴取に必要なこと，②音楽史，③さまざまなスタイルの音楽の聴取，④楽器の音色の聴取，⑤音楽と（他の）芸術，について説明し，「ヒントと課題」において実際に音楽を聴かせたりさまざまな参考図書を読ませたりすることで各内容を理解させるように構成されていた。さらに，読者（聴取者）自身の成長を確認させるための 17 の項目も用意されていた。

Johnson は，聴取者を「ふと耳にする人」，「聴衆」，「知的な聴取者」の 3 種類に分類していた。本書では，「ふと音楽を耳にする人」および「聴衆」を，「聴衆」からは一歩進んだ「知的な聴取者」にすることが意図されている。Johnson の考える「知的な聴取者」は，細部まで傾聴する人を指すが，細部とは，Johnson が「コーダ」において示した内容，すなわち楽曲の作られた年代，スタイル，形式，楽器の音色や，ソロか伴奏か，といった楽器の役割，等であるといえる。

Intelligent Listening to Music において，音楽を聴取する手段として蓄音機やラジオ放送，コンサートがあげられていたが，彼は特に蓄音機とラジオ放送を用いることを Johnson は推奨している。また，楽曲を繰り返し通して聴くことを述べていたことから，楽曲を聴取する最良の手段は蓄音機であると考えていた

といえよう。繰り返し聴くことで，「コーダ」にあげられていた楽曲の細部までを聴き取らせることを意図していたといえる。

音楽の形式やスタイル，作曲家，楽器に関する説明が *Intelligent listening to Music* の大部分を占めていることが明らかである。特に，各内容が音楽史に沿って説明されていることや，コーダに示した質問の中でも楽曲の年代を答えさせる項目を最初に位置づけていることからも，音楽史に関する内容は音楽を聴取する際に不可欠なものであると Johnson が考えていたことが分かる。

音楽と他の芸術との共通点についても述べていること，「ヒントと課題」において，絵画や詩と関連する行動を推奨していたことなどから，他の芸術との関連性も重視していたといえる。以上のことから，Johnson は，音楽を単に形式や楽器の音色といった音楽的な側面から聴取させるのではなく，作曲家がどのような時代・スタイルの人物であるかを捉えさせるとともに，音楽が芸術の中の 1 つであることを再認識させ，より多角的に音楽を聴取させようとしていたといえよう。

Johnson が知的な聴取を鑑賞として考えていた点は，MacPherson の音楽鑑賞教育観とも共通している。MacPherson が音楽鑑賞を行う手段として教師自身の演奏を強調していたことに対し，Johnson は，Scholes と同様に蓄音機やラジオ放送の使用を推奨していた。Johnson は Scholes の著書の多くを参考図書としてあげていたこともあり，Scholes の音楽鑑賞教育観の影響を受け，Scholes の音楽鑑賞教育観との共通点を多々有していたといえる。1920 年代までの MacPherson，Scholes の音楽鑑賞教育観の特徴と，今回 *Intelligent listening to Music* から得た 1930 年代の Johnson の音楽鑑賞指導法から，イギリスでは，教師自身の演奏を用いて，楽曲の細部まで聴き取ることが求められていた音楽鑑賞から，蓄音機やラジオ放送を用いて，楽曲の形式，歴史的な背景，楽器の音色，他の芸術との関連性などを包括的に把握して聴き取る音楽鑑賞に移行していったといえよう。

注

1） MacPherson, S., *Music and Its Appreciation, or the Foundations of True Listening*, Joseph Williams, 1910.
2） Rainbow, B., Cox, G., *Music in Educational Thought and Practice: A Survey from 800 BC*, Boydell Press, 2006, pp. 261-262.
3） MacPherson は，音楽鑑賞にもとづいた聴覚力の育成を目指して *Aural Culture Based upon Musical Appreciation* を著した。本書には，具体的かつ系統的な聴覚訓練法が提示されている。
4） 小林美貴子「20 世紀初期のイギリスにおける音楽鑑賞教育に関する研究－MacPherson，Scholes の音楽鑑賞教育観を中心に－」音楽教育史学会第 23 回大会（於：立教大学）発表資料，2010。
5） 同上。
6） Johnson, W. W., *Intelligent Listening to Music*, Sir Isaac Pitman & Sons, 1935, p. ix.
7） ここでは，第 1 次世界大戦の終わりに開かれた時代の作品を指す。作曲家としては，ホルスト，ストラヴィンスキー，サティなどがあげられる。
8） Johnson, W. W., op. cit., p. 114.
9） Ibid., pp. xii, 166.
10） Ibid.

参考文献

- Johnson, W. W., *Intelligent Listening to Music*, Sir Isaac Pitman & Sons, 1935.
- Jorgensen, E. R., "Percy Scholes on Music Appreciation: Another View", *British Journal of Music Education*, vol. 4, no. 2, Cambridge University Press, 1987, pp. 139-156.
- Moutrie, J., "The Appreciation Movement in Britain: MacPherson, Read and Scholes", Simpson, K. (Ed.), *Some Great Educators*, Novello, Reprinted 1981, pp. 60-69.
- Prictor, M., "To Catch the World: Percy Scholes and the English Musical Appreciation Movement 1918 -1939", *Context: Journal of Music Research,* vol. 15/16, University of Melbourne, 1998, pp. 61-71.
- Rainbow, B., Cox, G., *Music in Educational Thought and Practice: A Survey from 800 BC*, Boydell Press, 2006.

• Symes, C., "A sound education: the gramophone and the classroom in the United Kingdom and the United States, 1920-1940", *British Journal of Music Education*, vol. 21, no. 2, Cambridge University Press, 2004, pp. 163-178.
• 寺田貴雄「20 世紀初期のイギリスにおける音楽鑑賞教育－S. マクファーソンの音楽鑑賞教育論を中心にして」日本音楽教育学会第 25 回研究発表会（於：東京学芸大学）発表資料，1994。